GM 鶴牧-3 環の会

第 44 回クラシックを楽しむ会

2017 年 6 月 18 日（日）18:00～（2 時間 50 分、休憩除く）

タイトル：**歌劇「セビリアの理髪師」（ロッシーニ）**

会場等　：グラインドボーン音楽祭 2016
　　グラインドボーン音楽祭歌劇場
　　2016 年 6 月 17、21 日
楽団等　：ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、
　　グラインドボーン合唱団
指揮　　：エンリケ・マッツォーラ
演出　　：アナベル・アーデン
出演　　：ビョルン・ビュルガー（フィガロ）
　　ダニエル・ドゥ・ニース（ロジーナ）
　　テイラー・ステイトン（アルマヴィーヴァ伯爵）
　　アレッサンドロ・コルベルリ（バルトロ）
　　クリストファロス・スタンボグリス
　　ジャニス・ケリー
　　他

第 1 幕第 2 場　酔っぱらい士官に変装した伯爵が騒動を起こす

ダニエル・ドゥ・ニース（左）　ビョルン・ビュルガー（右）

あらすじ

医師バルトロは姪ロジーナの後見人で、彼女の遺産を手に入れようと結婚を目論んでいる。一方、ロジーナを恋するアルマヴィーヴァ伯爵は、理髪師フィガロの助けを借りて嫉妬深いバルトロの目をかいくぐり、ロジーナとの恋を成就させるオペラ・ブッファ。

見どころ聴きどころ

「序曲」は単独でもしばしば演奏される名曲。理髪師フィガロが登場して歌う**「私は町の何でも屋」**、アルマヴィーヴァ伯爵がフィガロのギター伴奏で歌う**「私の名が知りたければ」**、ロジーナがリンドーロへの愛を誓って歌う**「今の歌声は」**、音楽教師バジリオがアルマヴィーヴァ伯爵を醜聞で追い出そうと歌う**「陰口はそよ風のように」**など、聴きどころ満載。

グラインドボーン音楽祭とダニエル・ドゥ・ニース

この音楽祭は資産家の貴族ジョン・クリスティとソプラノ歌手の妻が 1934 年に創設。本公演の主役ダニエル・ドゥ・ニースは 2009 年にジョン・クリスティの孫で音楽祭委員長の当主ガス・クリスティと結婚してグラインドボーンの館に居住している。2015 年には男児を出産。

第 45 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：**歌劇「アンドレア・シェニエ」（ジョルダーノ）**

7 月 30 日（日） 17 時 30 分開場、18 時上映開始

フランス革命期の実在の詩人の半生を描いたヴェリズモ・オペラの傑作を、カレーラス、マルトン、カプッチッリの豪華スターを揃えたシャイー指揮ミラノ・スカラ座 1985 年の舞台をお楽しみに。

8 月「トゥーランドット」、9 月以降「ワルキューレ」「チャルダッシュの女王」など予定。

あらすじ

【時と場所】

時の指定はないが 18 世紀、場所はスペイン南部のセビリャ。

【主要人物】

フィガロ（Br）	理髪師。伯爵とロジーナの恋の仲介役
ロジーナ（S, Ms）	バルトロの姪
アルマヴィーヴァ伯爵（T）	スペインの貴族。ロジーナを見そめ、貧乏学生リンドーロと名乗る
バルトロ（Bs）	医師でロジーナの後見人。ロジーナの遺産を目当てに結婚を目論む
バジリオ（Bs）	ロジーナの音楽教師
ベルタ（Ms）	バルトロ家のメイド

【第 1 幕】

第 1 場　バルトロ邸バルコニー下の小広場、夜明け近く

アルマヴィーヴァ伯爵は街一番の美人ロジーナに一目惚れ、ロジーナの住むバルトロ邸の窓の下でセレナードを歌うが、後見人バルトロの監視が厳しく二人は会うことができない。そこに理髪師で街の便利屋フィガロが通りかかり、伯爵は報酬をはずむからと協力を依頼する。フィガロも伯爵の報酬を目当てに次々にアイディアを出す。ロジーナが窓から顔を出して「身分と名前を教えて」というメモを落とす。伯爵は彼女の誠実な気持ちを試すため、貧しい学生リンドーロと名乗ることにする。

第 2 場　バルトロ邸の一室

理髪師フィガロはバルトロ邸に入り込み、ロジーナにリンドーロ宛の手紙を書くように勧めるが、彼女はすでに書き終えていて、それをフィガロに託す。酔っぱらいの騎兵に扮装した伯爵がバルトロ邸にやって来てロジーナと話をしようとするが、この作戦はバルトロに怪しまれて失敗する。

【第 2 幕】

第 1 場　バルトロ邸の書斎

伯爵は、今度はバルトロの腹心である音楽教師バジリオの「弟子」アロンゾに変装。しかし、それでもバルトロに怪しまれ、仕方なくロジーナのリンドーロ宛の手紙を、アロンゾが伯爵の手から盗んだと言って渡し、味方だと思い込ませる。

第 2 場　バルトロ邸の一室、その日の夜

伯爵とフィガロが去ったあと、バルトロはロジーナに例の手紙を見せ、リンドーロはお前を伯爵に売ろうとしていると言う。怒ったロジーナはバルトロとでも誰とでも結婚すると言い出す。喜んだバルトロはすぐに結婚しようと公証人を呼びにやる。

伯爵とフィガロがバルコニーから忍び込むとロジーナは怒っている。リンドーロは実は伯爵だと身分を明かすとロジーナは大喜び。そこにバルトロが呼んでおいた公証人がやって来たので、その場で二人は結婚してしまう。バルトロが現れたときはすでに時遅し。仕方なしに二人の結婚を承諾。

ロッシーニ・クレッシェンド

「セビリャの理髪師」の序曲やバジリオのアリア「陰口はそよ風のように」など、ロッシーニの楽曲を特徴づけている独特のクレッシェンド（次第に強く）を**「ロッシーニ・クレッシェンド」**と呼ぶ。初めはゆっくり、小音量で始まり、早いリズムの短いフレーズをしつこく繰り返しながらだんだん色々な楽器群が同じ音型で加わって行き、オーケストラの全楽器がフォルテシモになるまで繰り返して、曲を盛り上げる。

カストラートが活躍したロッシーニ以前のイタリアの伝統的な歌唱法、装飾的で技巧的な**「ベルカント」**をロッシーニが極限まで開花させた。彼が目指したのは「自然で美しい声」「声域の高低にわたって均質な声質」「注意深い訓練によって、高度に華麗な音楽を苦もなく発声できること」にあり、知識として教えられるというよりは、最高のイタリア人歌手の歌唱を聴くことではじめて吸収・理解しうる名人芸であるとされていた。

主な出演者

ダニエル・ドゥ・ニース（1979 - ）

ダニエル・ドゥ・ニース

オーストラリア・メルボルン生まれのソプラノ歌手。両親は混血スリランカ人*の移民で、オランダ人とスコットランド人を先祖に持つ。彼女はオーストラリアの子供テレビタレント・コンペティションに最年少の 9 歳で優勝。その後家族と共にアメリカに移住。ロスアンゼルスでテレビの子供番組にレギュラー出演したことから 16 歳でエミー賞を受賞。オペラ歌手として 15 歳でロサンゼルス歌劇場にデビュー、19 歳でメトロポリタン歌劇場にデビューした後は世界の主要歌劇場に出演している。

*混血スリランカ人は 16 世紀から 20 世紀の植民地時代にセイロン島に入植した西欧人男性と現地人女性との子孫で、スリランカ・バーガー人などと呼ばれる。Cf. フランス植民地時代の北米ルイジアナで生まれた、フランス人・アフリカ人・スペイン人と先住民を先祖に持つ子孫（混血とは限らない）はクレオールと呼ばれる。

ビョルン・ビュルガー(1985 -)

ビョルン・ビュルガー

テイラー・ステイトン

アレッサンドロ・コルベルリ

ドイツ・フランクフルトに近いダルムシュタット生まれのバリトン歌手。ドイツ国内での目覚ましい活躍で、グラインドボーンの本公演デビューとなった。

テイラー・ステイトン(1985 -)

米国オハイオ州の地方都市生まれのテノール歌手。米国内で活躍し 2011 年にはメトロポリタン歌劇場デビュー。本公演の年にはロイヤル・オペラ・ハウスにもデビューしている。

アレッサンドロ・コルベルリ(1952 -)

イタリア・トリノ生まれの世界的に有名なバリトン歌手。モーツァルトとロッシーニを得意とし、エレガントな歌唱スタイルと鋭い性格描写、特にコミカルな役柄で絶賛されている。

エンリケ・マッツォーラ(1968 -)

エンリケ・マッツォーラ

アナベル・アーデン

スペイン生まれのイタリア人指揮者。イタリア各地で活躍し 2002 年にミラノ・スカラ座デビュー。2005 年にはスカラ座公演で「セビリアの理髪師」を指揮している。なお、度々来日してオペラ、オーケストラの指揮の他、リサイタル伴奏者も勤めている。

アナベル・アーデン(1959 -)

前衛的な演劇集団テアトル・ド・コンプリシテの共同創設者で女優。現在はオペラ演出家として大活躍中。本公演の洗練された舞台も大きな話題となった。

ロッシーニの歌劇について

ロッシーニ（メイヤー画）

この歌劇の後日談となるモーツァルトの「フィガロの結婚」とともに「セビリャの理髪師」はオペラ・ブッファ*の最高傑作。この歌劇をわずか 13 日間で作曲したロッシーニは、モーツァルトの死の翌年 1792 年生まれ。オペラの歴史に輝くイタリアの作曲家で 19 世紀前半に活躍し一世を風靡した。しかし 19 世紀半ばのヴェルディ、ワーグナーの時代になると「セビリャの理髪師」以外の作品は忘れられ、100 年後の 1970 年代になって再評価が進んだ。

* オペラ・セリアが王侯貴族のための高貴でシリアス（セリア）なオペラに対して、オペラ・ブッファは市民的で身近な問題を扱う即興的、喜劇的なオペラである。

原作者ボーマルシェ（1732～99）について

ボーマルシェ（ナティエ画）

フランスの劇作家。時計師、音楽教師、宮廷人、企業家、金融家、出版屋、武器商、土木工事請負人などの職業に従事したほか、訴訟に明け暮れ、入獄、亡命なども経験。多才で波乱万丈の生涯を送った。

彼の作品と登場人物を理解するのに、ルイ 15 世、16 世時代の、以下のエピソードが参考になる。もちろん主人公フィガロは彼の分身である。

・13 歳で父の時計工房に入り、21 歳の時、時計の時を正しく刻む機構「脱進機」を発明。宮廷御用時計工になる。

・この間、年上の若い女性たちにちやほやされ不安定な思春期を送る。

※「フィガロの結婚」の小姓のケルビーノを連想。

・王の食卓係大膳部官と知り合い、職を買って宮廷に入り、彼の死後はその未亡人と結婚。

・若い彼の魅力は宮廷の女性達のあこがれの的。ハープの腕を生かしてルイ 15 世の 4 人の王女達の音楽教師となる。

※「セビリャの理髪師」の音楽教師バジリオを連想。

・財務官が、王女達が信頼する彼に相談を持ちかけて王を動かせたことから、彼に全幅の信頼と感謝。

※「セビリャの理髪師」のアルマヴィーヴァ伯爵を連想。

・財務官は彼の強力な後ろ盾となったことから、資金を蓄えて貴族の肩書を得て司法官にもなる。

・恩人の財務官が死に、遺産相続人の伯爵から彼を誹謗・中傷する噂をまき散らされ、痛手を蒙る。

※「セビリャの理髪師」の音楽教師バジリオの歌う「陰口はそよ風のように」を連想。

・訴訟合戦の合間に「セビリャの理髪師」を完成。コメディ・フランセーズ上演候補となる。

・女優との情事で彼女のパトロン公爵と派手な喧嘩沙汰になり入牢。敗訴して路頭に迷う寸前に。

・遺産相続人との控訴審判事に反撃するため訴訟の経過を四つの「覚書」にして公開。時代の寵児に。

・社交界の名だたる夫人たちはこの「覚書」に熱中し彼の味方になる。

・裁判が終わり彼は凱旋将軍のように大衆から迎えられ、王の外戚大公は彼のために祝宴を催した。

このような経過の後も、ルイ 15 世、ルイ 16 世の密使として各国を渉って冒険。フランスの植民地がイギリスに奪われて屈辱を強いられている中、アメリカの独立運動支援で金儲けを目論み、フランス政府の支援の下、アメリカに莫大な軍事物資を送ったが、期待していた見返りがなく茫然自失。

ボーマルシェについて特筆すべき事項を二点あげる。

・「セビリャの理髪師」上演を巡って、劇作家の著作権を守るためコメディ・フランセーズの役者達と争い、**「劇作家協会」**を誕生させて、歴史的な著作権の権利公認を勝ち取る。

・ヴォルテールの遺志を継ぎ、フランスで発禁処分を受けている作品を含め、国境近くのドイツに出版社を設立して、**「ヴォルテール全集」**を発刊。

以上がフランス革命前までの、波乱万丈のボーマルシェ半生の主なエピソードである。この後も「フィガロの結婚」の完成とルイ 16 世による上演禁止に対する抵抗、フランス革命後の恐怖政治のなかで九死に一生を得て亡命するなど、彼の波乱万丈のエピソードは枚挙にいとまがない。